

## 概念の細分化による訳語の変動―「感応」「感覚」「感情」について

言語教育研究科 言語教育学専攻

博士後期課程 3 年

李 穩

### 要約

近代日本の心理学用語において、漢語を用いて外来概念に対応させた結果、学術用語として定着したものがある。本稿では、「感応」「感覚」「感情」を取り上げ、概念の細分化により訳語が入れ替わる現象を確認した。また、この三つとも中国へ逆輸入されている。ただし、「感応」に関しては、最終的には物理学用語として使われるようになった。

【キーワード】『哲学字彙』、『<sup>倭因氏</sup>心理新説釈義』、類義語、新漢語、英和辞典

### 1. はじめに

明治期には漢語の使用が急増し、その中には漢語に西洋概念を付与した語彙が多く見られる。たとえば、近代翻訳語の「意志」「意識」「観念」などが挙げられる。「意志」はもともと漢籍に使われていたが、その後、井上哲次郎著の『哲学字彙』(1881)や麻生繁雄編の『<sup>倭因氏</sup>心理新説釈義』(1883)などで will の訳語として定着した。「意識」は元来仏典語として用いられていたが、明治期には『哲学字彙』(1881)で英語 consciousness の訳語として定着するようになった。「観念」も本来仏典語であるが、明治初期に西周訳の『利学』(1877)で idea の訳語として使われており、その後、『哲学字彙』(1881)や『<sup>倭因氏</sup>心理新説釈義』(1883)などで idea の訳語として定着した。

一方、19 世紀末から漢語の「感応」は、feeling の訳語として哲学、心理学、教育学などの専門分野で広く使用されていた。日本初の心理学用語辞典『<sup>倭因氏</sup>心理新説釈義』(1883)には、「感応」が「フヒリング」というカナ表記で示され、詳細に解釈されている。しかし、現代の日本心理学辞書である『有斐閣 現代心理学辞書』(2021)には、「感応」という語は登録されていない。「意志」「意識」「観念」という漢語は、いずれも西洋概念と照合される際に、漢籍や仏典語から近代の新しい意味へ転用された。そして、現代日本語に至っても、これらの語は単独使用あるいは複合語の形で心理学用語として受け継がれている。

それに対して、「感応」という語は、明治期に漢籍や仏典で使われていた意味から西洋概念に対応した新しい意味で哲学や心理学において広く使用されていたものの、現代の心理学には継承されていない。ただし、現代日本語では、物理学用語としての「感応」は依然として使用されている。そこで、日本近代心理学用語の成立について、古典から近代的な意味へと転換される際、これらの近代概念が現代心理学用語としてどのように継承されるかという課題が見られる。

本稿では、明治期における訳語の「感応」を取り上げ、その語の成立史を辿りながら、学術用語としてどのように定着したか、また、ある分野に定着しなかった語がどのように他の分野に定着したのかを跡づける。そして、英語 feeling を訳す際に、その類義語としての「感覚」や「感情」がどのように使用されたか、あるいは「感応」がどのように「感情」に置き換わったかを検討し、そのプロセスを明らかにする。

## 2. 近代概念への接近

### 2.1 「感応」と feeling の対応過程

『日本国語大辞典』（第2版）（以下『日国』と略す）によると、「感応」は次の4つの意味と使用例が確認できる。本稿では、『日国』に収録された用例の中から、より古い出現例を抜粋する。

かん-のう【感応】〔名〕

① 仏語。

① 仏が人に応じたはたらきかけ（応）と、人がそれを感じとる心のはたらき（感）。

\*法華玄義-六上「果智寂照有<sub>レ</sub>感必彰。故明<sub>二</sub>感応妙<sub>一</sub>也。即為<sub>レ</sub>六。一釈<sub>二</sub>感応名<sub>一</sub>」

㊦（転じて）信心が神仏に通じること。感通。

② 心が感じこたえること。また、感動すること。

\*易経-咸卦「彖曰、咸、感也。柔上而剛下。二氣感応以相与」

③ 感覚器官が刺激に反応すること。

④ 導体が磁気または電気を帯びること。

つまり、日本語の「感応」という語は早くに中国の古典に見られる。また、『和英語林集成』（初版 1867, 再版 1872, 三版 1886）には既に「感応」が収録されており、それぞれの版では、次のように述べている。

KAN-NŌ, カンオウ, 感應, n. a favorable answer to prayer. — *ga aru*. (初版)

KAN-NŌ, カンオウ, 感應, n. An approving response; a favorable answer to prayer.  
— *ga aru*. (再版)

KANNŌ カンオウ 感應 n. An approving response; a favorable answer to prayer;  
good effect, as of medicine:— *ga aru*. (三版)

ここでは初版から三版までの「感応」はまだ「感通」や「感じこたえること」という旧来の意味を表す。しかし、当時の外来概念と対応したことで、翻訳書や他の辞書には③あるいは④の意味が見られる。例えば、普林篤(フリント)著、松山棟菴(勤)訳の『奎扶斯新論 2巻』(1868:15)には「五官ノ感應」という使い方が見られ、抱独英(パウドイン)口授の『日講紀聞 巻4 原生科 飲食消化篇』(1870:1)には「知覺感應」といった使用がある。また、『百科全書 電気篇 下』(1876)には、

(1) 磁石ノ鋼鐵片ニ感應スル速度ハ鍊鐵ニ感應スルガ如クナラズ(32 頁)

とあるように(下線は筆者、以下同様)、「導体が磁気または電気を帯びること」という意味がはじめて使用された。そして、宇田川準一編訳の『物理全志 九』(1876-1877)にも電力と関係する「感応」の意味で用いられていた。

(2) 是レ地磁ノ作用ヲ中和消亡シテ以テ些少ノ電力ニ感應セシムルカ爲メナリ(22 頁)  
すなわち、1870 年代の生理学や物理学の翻訳書において、「感応」はすでに「感覚器官が刺激に反応すること」や「導体が磁気または電気を帯びること」という意味で使われていた。1880 年代に入ると、井上哲次郎著『哲学字彙』(1881)において、feeling の訳語として「感応」が採用されて以来、心理学書の翻訳において「感応」の使用が多く見られるようになった。

川本清一訳の『百科全書:人心論』<sup>1</sup>(1882)の「目録」には、「智力ノ感應」や「美術ノ感應」などが見られる。井上哲次郎抄訳の『<sup>倭因氏</sup>心理新説』<sup>2</sup>(1882)の「巻之一」では、「感応」をどのように解釈していたかが確認できる。

(3)感應トハ、總ベテ人ノ苦痛、快樂、及ビ其他ノ諸感動ヲ謂フナリ、溫煖、飲食、音樂ノ快樂、貧困、懊惱ノ苦痛、周障、及ビ驚駭并ニ輕キ物ヲ支へ、几案ニ觸レ、遠處ノ犬聲ヲ聽ク等ノ諸感動ハ、皆之ヲ感應トスルナリ(3 頁)

翌年、麻生繁雄が編纂し、井上哲次郎が校閲した『<sup>倭因氏</sup>心理新説釈義』<sup>3</sup>(1883)には、

(4)感應「フヒリング」感應トハ心身受クル所ノ百般ノ感動ヲ総稱スルモノ是ナリ事物ノ醜美行為ノ善惡季節ノ寒煖及ビ苦痛快樂等悉ク皆之ニ因リテ人心ニ傳布スルモノニシテ或ハ直接ニ或ハ間接ニ身体及ビ心意ヲ感動セシムルモノトシテ感應ノ作用ニアラザルハナシ(11 頁)

と、明確に「感應「フヒリング」」と記されている。これらの心理学に関わる書物の刊行により、心理学領域における「感応」の使用が徐々に広まっていったと考えられる。そして、湯本武比古の訳著『小学校教師用心理学摘要』<sup>4</sup>(1888:49)には、「感應<sup>ゲフュール</sup>」の総論があり、そのゲフュールはドイツ語の Gefühl であり、英語 feeling の意味と同じである。つまり、当時「感応」が英語 feeling の訳語として定まっていた。

## 2.2 「感応」に含まれる「感覚」

『日国』を引くと、「感覚」には次の 3 つの意味およびより古い用例、そして語誌記述が確認できる。

かん-かく 【感覚】〔名〕

① 音、色、味、寒煖などから受ける印象や感じ。心理学では、感覚器官に加えられた刺激によって生じる意識をいい、刺激の加わる器官に応じて、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などに分類される。

\* 訳鍵 [1810] 「Verstand 才智 精神 思慮 感覚 達人」

②(一する)物事の実体を鋭敏に感じとる精神のはたらき。また、実感として感じ知ること。深く感じ入ること。感受性。

＊自由之理〔1872〕〈中村正直訳〉三「凡そ人に存する才能感覚の類を圧服するは、悪事に非ず」

③思慮によらないで、表面的な感じ方をすること。また、その感じ。

**語誌**①一八世紀末、江戸の蘭学者による造語か。後に幕末、明治初期の英和辞典では、Sensation, Sense の翻訳語として用いられるようになる。②②の举例「自由之理」では Susceptibilities を「感覚」と訳しており、精神的はたらき、感受性という意味合いも早く明治期に成立していたらしい。

上述の通り、①の『訳鍵』(1810)の例と②の『自由之理』(1872)の例があり、「感覚」は蘭学者による和製漢語とされている。しかし実際には、「感覚」という語は中国出自の漢語で、漢の蔡邕の『蔡中郎集 卷二』ですでに次のように使用されていた。

天於大漠、殷勤不已。故屢出妖變、以當責讓。因以感覺、則危可為安、凶可作吉。

ここにおける「感覚」とは「心感覺悟」を意味している。1805 年に至って、日本の近世蘭学者である宇田川榛斎が訳した『西説医範提綱釈義』(二)に「<sup>ハナハダシキ</sup>神經ニ充滿スルノ已甚ニ至レバ感覺スルヲモ其極ニ至リ」と訳され、「感覚」が初めて日本語で使われた。

一方、英語 sensation は、『英和对訳袖珍辞書』(1862)ですでに「感覚」と訳され、「感覚器官に加えられた刺激によって生じる意識」を意味していた。また、『和英語林集成』(1872)の「英和の部」では sensation の訳語は「chikaku」があてられているが、『和英語林集成』(1886)では「chikaku」に加え、「kankaku, kanji」も sensation の訳語とされた。その他には、『哲学字彙』(1881, 1884)でも「Sensation 感覚」と明記されている。しかし、『和英語林集成』(1868, 1872)の「和英の部」には「感覚」が収録されていないが、ようやく『和英語林集成』(1886)に「感覚」という語が現れた。

KANKAKU カンカク 感覺 n. Sensibility; feeling; perception; sensation:— *wo ushinau*, to be insensible; *iya na — wo okosu*, to feel badly.

ここでの「感覚」は sensation 以外にも、sensibility、feeling および perception といった英語訳語として用いられていることが確認できる。

また、「感応」と「感覚」の関係を指摘したのは雲英晃耀が著した『東洋心理初歩』<sup>5</sup>(1885)である。その中に、

(5)心理學ノ大要ヲ擧グレバ先ヅ一心理ヲ三種ニ大別シ第一ヲ感應ト云ヒ第二ヲ意志ト云ヒ第三ヲ智力ト云フ感應ニ亦タ感覺、情緒ノ二種ノ別アリ感覺ハ耳目鼻口等ノ五官ノ外物ニ接遇感觸シテ智覺ヲ生ズルノ能力ヲ云フ之ヲ初發ノ感應トス是レ即チ吾人ノ直接ニ外物ニ接觸シテ生ズル所ニシテ智力ニ關スルコト甚ダ少シ次ニ情緒ハ感覺ヨリ派生シタルモノニシテ智力ニ關スルコト多シ故ニ情緒ヲ以テ複雑ノ感應トナス(24 頁)

とあるように(下線、点線、破線は筆者)、「感覚」は「初發ノ感應」であり、「情緒」は「複雑の感應」である。また、『術語詳解:教育心理論理』<sup>6</sup>(1885)は、「感応」について次のように述べている。

(6) <sup>カンノウ</sup>(感應)〔フー井リング〕感應トハ心身受クル所ノ凡百ノ感動ヲ總稱スルナリ物ノ美惡、行為ノ善惡及寒暖、苦痛、快樂等或ハ直接ニ間接ニ心身ヲ感動セシムル者一トシテ感應ノ作用ニアラザルハ無シ故ニ感性ハ心意ヲ感ズル者ノミニ限ルト雖感應ハ心意ゼザル身體ノ感覺ヲモ總テ包含スル者ナリ之ヲ感觸ト譯スルモアリ(51頁)

すなわち、「感応」は身体の感覚と心意上の知覚を包含する者の総称であり、「感触」と訳すこともある。一方、同書では「情緒」について、次のような記述がある。

(7) <sup>ジョウショ</sup>(情緒)〔エモオション〕情緒ハ心裡ニ感覺ノ起ルアリテ隨テ意志ヲ動シ其ノ心意自外貌ニ顯ハルルノ状態ヲ云フナリ……(中略)……又情緒ハ感應〔フー井リンク〕ニ異ナリ感應ハ先直接ニ肉體ニ感覺シ次ニ心意上ニ知覺ヲ生ジ或ハ肉體上ニ快樂苦痛ヲ生ズル者ナリ(135-136頁)

このことから、「情緒」は心の中の状態を指し、「感覚」は肉体に感じるものとして使われていたことが分かる。つまり、feeling の対訳概念としての「感応」は「感覚」と「情緒」の二重概念を表していると言える。

実際に、能勢栄が訳した『根氏心理学(教育応用)』<sup>7</sup>(1893)の「序文」では、当時の尋常師範学校を卒業した教員であっても、以下のように「感応」と「感覚」との区別を知らないと指摘されている。(下線は原文のまま)

(8)予が曾て目撃する所に由れば、尋常師範学校を卒業したる正教員にして、概念と觀念と、感覺と感應との區別を知らず、意志と意識と抽象と概括との説明を為すこと能はざるものあり。而して其の學習した心理學の書を問へば、倍因氏及び左禮氏の書を學べりと答ふ。(4頁)

このようなことから、西洋の概念を吸収する過程において、「感覚」と「感応」のような類義語が多く見られる一方で、その区別の難しさが窺える。いわゆる西洋の概念に対応する際、「感覚」や「感応」といった訳語の使用においていくつかの問題が浮き上がる。そこで、feeling の訳語としてどのように展開され、定着したのかについて、当時の英和辞典を引いて詳しく検討する必要がある。

## 2.3 英和辞典における「感応」「感覚」「感情」の対訳

前述の通り、「感応」や「感覚」という語は中国の仏典や古典から日本に伝わってきた用語であることがわかる。それに対して、「感情」という語がいつ、どこで、どのように、そしてなぜ feeling の訳語として使用されるようになったのかについては、その語の意味変遷を振り返ってみなければならない。

『日国』によると、次の意味記述および用例が確認できる。

かん-じょう【感情】〔名〕

①「かんせい」(感情)

物事に感じて起こる心のはたらき。特に、深く心にしみて感嘆する趣き、しみじみとした感動の気持などをいう。心の高まり。感興。かんじょう。

＊万葉集〔8C 後〕一六・三八五七・左注「感情馳結、係恋実深」

②物事に感じて起こる心持。気分。喜怒哀楽などの気持。特に心理学では、意識の主観的側面、感覚や観念に伴って起こる快、不快や情緒、情操の状態をいう。

＊文明本節用集〔室町中〕「感情 カンジャウ」

③理性を失ってある気持にとらわれること。

＊洒落本・魂胆惣勘定〔1754〕中「是は馴染程(なじむほど)感情(カンジャウ)になりたるものなり」

つまり、「感情」という語は古くは「かんせい」と読み、『万葉集』ですでに①の意味で使われている。その後、『文明本節用集』で意味②を表すようになる。さらに、『魂胆惣勘定』で意味③が見られる。実際、「感情」も中国由来の漢語で、晋劉伶の『酒徳頌』には、すでに「不<sub>レ</sub>覺<sub>二</sub>寒暑之切<sub>レ</sub>肌、利欲之感<sub>レ</sub>情」と記されており、意味①に該当する。

一方、「感情」は「感覚」と同様に、『和英語林集成』(1868, 1872)には「感情」が収録されていないが、『和英語林集成』(1886)には、

KANJŌ カンジャウ 感情 n. Mental emotion; admiration

という記述がある。つまり、「感情」には「喜怒哀楽などの気持」や「感嘆」という2つの意味が含まれていることがわかる。それに対して、『和英語林集成』(1868, 1872, 1886)の「英和の部」における feeling を調べると、次の記述が見られる。

FEELINGS, Kokoro mochi; kimochi; kibun; kimi; chikaku; oboye; shōne. (初版)

FEELING, n. Chikaku, kokoro-mochi, ki-bun, ki-mochi, kimi, oboye, shōne, zonjiyori. *Destitute of* 一, nasake nai. (再版)

FEELING, n. Chikaku, kokoro-mochi, kibun, kimochi, kimi, oboe, shōne, zonjiyori. *Destitute of* 一, nasake nai. (三版)

要するに、『和英語林集成』では、見出し語としての feeling には「心持ち」や「知覚」などの訳語が付されている一方で、「感応」「感覚」「感情」という3つの訳語は見受けられない。しかし、前述した第三版の記述「KANKAKU カンカク 感覚」からわかるように、すでに feeling を用いて意味の解釈がなされていた。それにもかかわらず、「英和の部」の見出し語である feeling に訳語としての「感覚」が見られないのはなぜだろうか。

一方、高橋五郎の『漢英対照いろは辞典』(1888)には、

かんじやう(名) 感情(物に感ずるの情を謂ふ) Feeling, sensation.

とあり、英語 feeling と sensation を「感情」に当てている。同様に、ゼー・エツチ・ガビンスの『漢語英訳辞典』(1889-1892)には、次のように『漢英対照いろは辞典』の feeling

が継承されている。

Kan-jō | 情, a feeling of admiration; sentiment of wonder.

すなわち、『和英語林集成』には「感情」と feeling との対応関係は見られないが、その後の『漢英対照いろは辞典』や『漢語英訳辞典』にはその対応関係が存在していたといえる。では、なぜ「感情」と feeling との対応にはこのような揺れが生じたのだろうか。これらの問題を解決するためには、同時代の英和辞典を用い、英語 feeling の訳語の変動を確認することが必要である。本調査では、1862 年から 1902 年にかけての 40 年間に刊行された英和辞典を利用し、考察を行った。その結果は、下記の表 1 のようにまとめられる。

表 1 英和辞典における Feeling

出版年・辞書	著者	Feeling
1862『英和对訳袖珍辞書』	堀達之助	知覚感觸
1873『附音挿図英和字彙』	柴田昌吉・子安峻	フ レ ゴ クワン イツ 覺官(五 官 ノ 一)、感動、知覺、 <sup>ジシン</sup> 慈心
1881『哲学字彙』	井上哲次郎	感應
1882『英和字彙 増補訂正 改訂 2 版』	柴田昌吉・子安峻	覺官(五官ノ一つ)。感動。感觸。感應。知覺。慈心。情。感情
1884『改訂増補哲学字彙』	井上哲次郎	感應 Actual feeling 能感 Passive feeling 所感
1885『英和双解字典』	ピー・エー・ナッタ ル著, 棚橋一郎訳編	カンドウ <sup>ジシン チカク</sup> 感動。感觸。感應。慈心。知覺。情。感情。 <sup>カククワン</sup> 覺官
1886『新撰英和字典』	井波他次郎編訳	知覺。感官(五感ノ一)。感動。慈心。(哲)感應
1888『和訳字彙: ウェブスター氏新刊大辞書』	イーストレーキ, 棚橋一郎訳	〔五官〕覺官; 感動、知覺、慈心; 〔哲〕感應 Actual <i>feeling</i> . 〔哲〕能感 Passive <i>feeling</i> . 〔哲〕所感
1897『英和字典』	中澤澄男等編	①感覺, 知覺. ②意思. ③情.
1901『新英和字典』	和田垣謙三著	1. 感覺, 觸感. 2. 意思. 3. 感情.
1902『新訳英和辞典』	神田乃武等編	①觸感, 感覺. ②感動, 感情. ③多感

表 1 に示された feeling の訳語からわかるように、1881 年の『哲学字彙』の前まで、「感応」という訳語が現れていない。日本初の英和辞典『英和对訳袖珍辞書』(1862)では、feeling を「知覚感觸」としている。また、明治 6 年(1873)の『附音挿図英和字彙』でも、feeling を「感動」や「知覺」などと対訳している。ようやく、『哲学字彙』(1881)になって初めて「感應」が feeling の訳語として使用された。その翌年、『英和字彙 増補訂正改訂 2 版』



(1882)でも英語 feeling に「感応」とともに、初めて「感情」という訳語も付け加えられた。

同様に、1885年の『英和双解字典』にも「感応」と「感情」が feeling の訳語として見られる。その後の『新撰英和字典』(1886)には、「感応」が feeling の訳語として用いられ、さらにマーカー「(哲)」が付されたことで、専門用語として明確に位置づけられた。そして、『和訳字彙: ウェブスター氏新刊大辞書』(1888)では、『改訂増補哲学字彙』(1884)における「能感」と「所感」が継承され、「感応」にもマーカー「(哲)」が付されている。ただし、1897年の『英和字典』では、feeling の訳語として「感応」ではなく「感覚」が採用されている。さらに、1901年の『新英和字典』および1902年の『新訳英和辞典』では、「感応」も使用されず、その類義語である「感覚」と「感情」が feeling の訳語として完全に定着していることが窺える。

つまり、英和辞典における feeling からわかるように、1881年に初めて「感応」と訳され、その翌年には「感情」との対応関係が見られるようになった。しかし、辞書による訳語の揺れがあることから、当時ではまだ「Feeling 感情」として一般化されていなかったと考えられる。「感覚」は最初に英語 sensation の訳語として用いられていたが、翻訳概念の変化に伴い、feeling の訳語としても使われているようになったことがわかる。1902年頃になると、英和辞典において「感覚」や「感情」が feeling の対訳としてようやく定着するようになった。

なぜ「感覚」が feeling の訳語として用いられていたのかを考えると、その英語の意味との関連が見いだせる。*Oxford English Dictionary*<sup>8)</sup>における feeling の解釈には、以下の記述がみられる。

A physical sensation or perception (as of touch, heat, cold, pain, motion, etc.) experienced through this capacity. (a1425-)

すなわち、元々 feeling の意味解釈には「sensation」が含まれていたからである。一方、なぜ英語の翻訳語としてこのような揺れが生じたのか、結局 feeling は「感応」として定着していなかったのかを考えると、この時期の心理学の発展に伴い、概念の細分化による心理学用語の変化と関係していると思われる。明治期の心理学書における「感応」「感覚」「感情」の使用状況をさらに詳しく検討する必要がある。

### 3. 「感応」使用の衰退

日本の心理学の先駆者西周(1829-1897)がジョセフ・ヘブーン<sup>9)</sup>の著 *Mental Philosophy* を『心理学』<sup>10)</sup>(1875~1876)と題して訳し、公刊したことがこの分野の嚆矢となる。したがって、まずこの書物において「感応」「感覚」「感情」が使われているかどうかを確認し、使用されている場合には、それぞれがどのような英語と対応しているのかを確かめる。

その結果、奚殷氏著・西周訳『心理学』(1875-1876)では、「感応」と「感情」は確認さ



れないが、「感覚」は148件見られた。また、「感動」が英語 feeling の訳語として45件確認される。『和英語林集成』(1872)では、sensation の訳語が「chikaku」とされていたが、西周訳『心理学』においては、「知覚」を perception、「感覚」を sensation というふうに区別している。したがって、心理学の始まりとして位置づけられる『心理学』において、英語 feeling が「感応」「感覚」「感情」として訳されていないことから、この時期における feeling の翻訳概念はまだ初期段階にあったと考えられる。

しかし、1882年にペイン<sup>11</sup>の心理学書の翻訳ブームが始まって以来、feeling の訳語としては「感応」「感覚」「感情」などが次々と生み出された。特に、「感応」の使用が顕著に見られる。事実上、生理的心理学の思想を主張したのはペインの功績であると言えるが、高島(1912:7)には、

我国に行はれたる訳書は、原書の意を適当に且つ充分に表明せしものなく、只読者を霧を隔てて花を見たるに過ぎざりしが如し

と指摘されていた。つまり、当時の日本で刊行されたペインの翻訳書は、いずれも原書の意図を適切かつ十分に表現したものではなかった。その結果、読者にとっては、霧の中から花を遠くに眺めるように、内容が曖昧で十分に理解できなかったのだろう。

こうした状況の中で、新たな心理学翻訳書の必要性が高まり、その流れはもはや止めることができないものとなった。サリー<sup>12</sup>の翻訳書は、ペインの翻訳書とほぼ同じ時期に生み出されたものである。特に、サリーの原書はペインの著作と比べて、やや通俗的な内容であると同時に、有賀長雄の『教育適用心理学』<sup>13</sup>(1886)は原書の主旨を的確につかんでおり、教育社会に大きな貢献を果たしたと考えられる。さらに、サリーの著作は、ヘブンの思想とペインの学説をあたかも融合し、折衷したかのように、その論説は公平で理解しやすいものとなっている。したがって、ペインとサリーの翻訳書の両方を検討する必要がある。これらの翻訳書には時代的な重なりが存在するため、訳書について年代順に調査結果を図1のように示す。

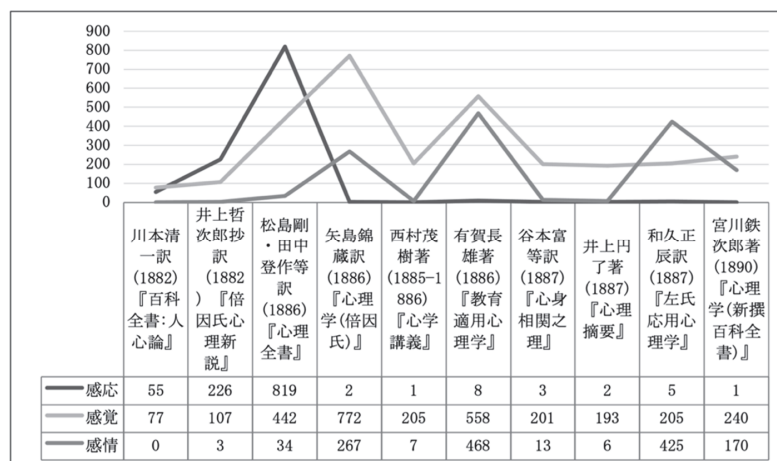


図1 1882-1890年の心理学翻訳書における「感応」「感覚」「感情」の競合

図1からわかるように、「感応」「感覚」「感情」の競合の中に、「感応」の使用が一時的に優勢となったものの、すぐに衰退した。具体的には、ベイン時代(1882-1892)において、たとえば川本清一訳『百科全書：人心論』(1882)と井上哲次郎抄訳『<sup>倍因氏</sup>心理新説』(1882)には「感応」の使用がそれぞれ55件と226件見られる。また、松島剛・田中登作等訳『心理全書』<sup>14</sup>(1886)には819件の「感応」が確認される一方で、同年の矢島錦蔵訳『心理学(倍因氏)』<sup>15</sup>(1886)にはわずか2件、翌年の谷本富等訳『心身相関之理』<sup>16</sup>(1887)においても「感応」の使用例は3件にとどまっている。

1886年以降のサリー時代(1884-1890)も、「感応」の使用例は非常に少ない。特に、西村茂樹著『心学講義』<sup>17</sup>(1885-1886)や宮川鉄次郎著『心理学(新撰百科全書)』<sup>18</sup>(1890)における「感応」の使用はそれぞれ1件しか見られない。一方で、「感覚」と「感情」は有賀長雄著『教育適用心理学』(1886)で非常に頻繁に使われており、それぞれ558例と468例見られる。また、和久正辰訳『左氏応用心理学』<sup>19</sup>(1887)において「感情」の使用は425件に達し、全体で二番目に多い。

1886年に「感応」の使用がピークに達した要因として、当時のベインの心理学書の翻訳ブームによる影響が挙げられる。特に、この現象においては、『心理全書』が重要な役割を果たしたと推測される。一方、同じ1886年において、ほかの心理学書では「感応」の使用件数が急激に減少している。このことから、feelingの訳語としての「感応」は「感覚」や「感情」に置き換えられた可能性が高いと考えられる。

それでは、なぜ同じベインが著した *Mental Science* を訳した三冊の心理学書、『<sup>倍因氏</sup>心理新説』(1882)、『心理全書』(1886)および『心理学(倍因氏)』(1886)において、「感応」という訳語の使用に大きな違いが見られるのだろうか。これについて、各英語原文とそれぞれの訳本を比較しながら考察する必要がある。その結果を下記の表2にまとめる。(網掛け、下線、波線は筆者)

表2 *Mental Science* と各訳本比較

<i>Mental Science</i>	『 <sup>倍因氏</sup> 心理新説』	『心理全書』	『心理学(倍因氏)』
FEELING IN GENERAL	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ總論	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ總論	一般ニ感 <sup>下</sup> 情 <sup>下</sup> ヲ論ス
CHARACTERS OF FEELINGS	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ質性	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ質性	感 <sup>下</sup> 情 <sup>下</sup> ノ質性
The Characters of Feeling fall under four classes	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ四箇ノ質性アリ	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ質性四種アリ	感 <sup>下</sup> 情 <sup>下</sup> ノ質性ハ四類ニ分ツ
Emotional Characters of Feeling	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ情緒性	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ノ情緒性	感 <sup>下</sup> 情 <sup>下</sup> ノ情緒的ノ質性
Every feeling has its characteristic PHYASCAL side	感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ハ、各身体上ヨリ觀ルヲ得	各感 <sup>下</sup> 應 <sup>下</sup> ハ固有ナル身體方面ヲ有ス	各感 <sup>下</sup> 情 <sup>下</sup> ハ特別ナル肉體側ヲ有ス

Volitional character of <b>Feeling</b>	<u>感應ノ執意性</u>	<u>感應ノ執意性</u>	<u>感情ノ執意的質性</u>
The voluntary actions a clue to the <b>Feeling</b>	意志ハ、 <u>感應ニヨ</u> リテ發動ス	有意ノ行爲ハ <u>感</u> <u>應ヲ知ルノ端緒</u>	意志ハ <u>感情ニ依テ發</u> 動ス

上記の表 2 に示すように、『心理全書』(1886)は『<sup>倍因氏</sup>心理新説』(1882)の訳語を援用し、同じように「感応」を英語 feeling と対訳していることがわかる。それも『心理全書』(1886)の「凡例」における「倍因氏心理新説等ノ諸書ヨリ採ルモノアリ」という記述に合致している。しかし、同年の『心理学(倍因氏)』(1886)には「感応」の代わりに「感情」という訳語が使われている。その「凡例」では訳語の基準について以下のように述べている。

譯者ハ甚タ一定セサルカ故ニ或ハ諸ノ譯書及ヒ字彙ノ類ヨリ最モ適當ナリト思ヘルヲ  
取り或ハ新ニ之ヲ選ミタリ故ニ讀者或ハ其ノ意義ヲ得ルニ難カラン然レ |モ術語ハ勿  
論苟クモ學問上ニ少許ノ關係アル者ハ通篇一定ノ文字ヲ用ヒ漫リニ變更スルヲナク又  
原語ヲ傍註スルヲ以テ篇ヲ通シテ參考徧觀セハ自カラ了解スルヲ得ン是レ譯者ノ企望  
スル所ナリ

要するに、矢島錦蔵は feeling を訳した際に、その訳語の意義や読者の理解を重視し、「感情」を最も適当な訳語として用いている。しかし、「感情」と feeling の対応関係はまだ一般化されていなかった。

実際に、西村茂樹著『心学講義』(1885-1886)では、「感応」はまだ「感通」の意味を表し、「感覚器官が刺激に反応すること」という意味を持っていない。それに対して、「感覚」は 205 件あり、その「第五冊」の中には、

(9)凡ソ外物ノ來リテ吾自識ニ入ル |キハ、人心ハ忽チ之ニ感ジテ種々ノ性相ヲ現スル  
者ナリ、即チ喜樂驚愕希望規避親愛憎惡、或ハ趣味ノ感、道德ノ感、其他此ノ如キ  
情狀ヲ發スルナリ、是等ノ情狀ヲ總テ名ケテ感覺ト云ヒ(2 頁)

と、心の動きによって起こる「感覚」の概念で解釈されている。つまり、『心学講義』で言及されている「感覚」には、五感によるものと心の動きによるものの二種類が含まれている。これは、前節で述べた「感応」に含まれる身体感覚と心意上の知覚に似た部分があり、「感覚」と「感応」の曖昧さが見られる。特に、『心学講義』第六冊(1886:97)<sup>20</sup>では、明確に「感覺 <sup>フシツ</sup>」と記されており、いわゆる「感覚」は英語の feeling の訳語であることが示されている。

しかし、サリー時代の代表的な書物である有賀長雄著『教育適用心理学』(1886)では、英語の feeling は「感」或いは「感情」と訳されている。また、第六冊第十二章「感情(單純感情)」では、「感情の定義」に関する解釈が見られる。

(10)感情ハ一切諸種ノ快樂苦痛ヲ總括スル者ナリ。サレバ此ノ名目ハ第一ニ直接ノ神經衝動ニ因テ生スル單純心狀ニシテ通例快樂又ハ苦痛ノ感覺ト稱スル所ノ者ヲ包含ス、……(中略)……第二ニ一定ノ心意發動ニ由テ生スル複雑心狀ニシテ情緒ト

稱スル所ノ者ヲ包含ス、(701-702 頁)

つまり、ここにおける「感情」は、矢島錦蔵訳『心理学(倍因氏)』(1886)の「感情」と同じ意味を持つ。その「感情」には、「単純心状」と「複雑心状」が含まれており、いわゆる「感応」に含まれる「感覚」と「情緒」という二重概念を成している。一方、この書物における「感応」の使用例を確認すると、旧来の「心が感じこたえること」という意味を表すものが多く見られる。要するに、「感応」の代わりに「感情」を使っていることが分かる。

一方、ペインが著した *Mind and Body: The Theories of Their Relation* (1883) を底本として翻訳された『心身相関之理』(1887)では、「感応」という語がほとんど使われていない。その理由を明らかにするため、原文と訳文を比較した結果を表3に示す。

表3 『心身相関之理』と英語原文の比較

<i>Mind and Body: The Theories of Their Relation</i>	『心身相関之理』
THE FEELINGS	感覺 The Feelings
WE all know pleasure and pain, and we are familiar with states of excitement that are neutral or indifferent. When Feeling is opposed to Will and Thought, it is most characteristically represented by pleasures and pains; these are never confounded with Thought, and although they are motives to the Will, they do not make up the Will.	感覺ニハ快樂、痛苦及ヒ中性感動 Indifferent excitement ノ三様アルヲ諸人ノ熟知スル所ナリ總シテ感覺ノ思想及ヒ意志ト異ナル所以ハ特ニ快樂、痛苦ノ感覺ニ就キテ講察セハ判然タルヘシ、蓋シ快樂、痛苦ハ共ニ思想ト全ク別ナルモノニシテ、尚且ツ時ニ意志ノ動機 Motive タルヲ得ヘシト雖モ……(後略)……
The varieties of Expression of the feelings constitute a study of great interest as regards our present theme; but……(後略)……	因ニ曰ク感應ニ伴フ所ノ種々ノ容貌ヲ研究スルハ本題ニ係リテ大ニ必要ノヲナレモ
The face of inanimate nature does not arrest our attention so strongly as the deportment of our fellow beings; in truth, the highest attraction of natural objects is imparted to them by a fictitious process of investing them with human feelings. ……(後略)……	人情ノ自然ニ外ナランヤ、将タ無情物ノ状貌亦實際無情物ヲ見テ感動スルヲアルハ、假リニ人類ノ感情ヲ移附シテ、之ヲ有情物ト見做セハナリ、……(後略)……

表3 からわかるように、『心身相関之理』(1887)では、英語の feeling が「感覚」、「感応」および「感情」という3つの異なる訳語をもって訳されている。そして、その中には、「感覚」は201件、「感情」は13件が確認される。また、「感応」は3件であり、そのうち

の1件が「導体が磁気または電気を帯びること」という意味として用いられる。つまり、『心身相関之理』(1887)には、feeling を訳す際に「感覚」をその訳語として用いる傾向が見られる。この結果から、当時の「感覚」は sensation の訳語として既に定着したものの、feeling の訳語としても「感情」より一般的に使われていたことが分かる。

しかし、「感情」の使用が二番目に多い『左氏応用心理学』(1887) には、「感覚(Sensation)」 「感情(Feeling)」と記されている。すなわち、この書物においても「感情」はすでに feeling の訳語として使用されていることが分かる。

さらに、『心理学(新撰百科全書)』(1890)には、「感覚」と「感情」の出現件数はそれぞれ 240 件と 170 件ある。その「第五章 感覚力(Sensation)」において、「感覚ハ知識ノ基礎ナリ」と述べられている。また、心意の作用の分類には、「<sup>エモーション</sup>感情」と「フ<sub>井</sub>ーリング」(感情)」が含まれており、「感情」は emotion と feeling に訳されていることが確認できる。一方、「心意ノ作用」は「智力」「感情」「意志」、または「ノーイング」「フ<sub>井</sub>ーリング」「ウィリング」に分けられており、この三分類は前述の『東洋心理初歩』(1885)における「感応」「意志」「智力」と同じである。すなわち、『心理学(新撰百科全書)』(1890)では、訳語「感応」の代わりに「感情」を使っていると考えられる。

要するに、1882 年から 1890 年にかけて「感応」の使用が一時的に増えたものの、ほどなくして「感覚」や「感情」に置き換えられた場合が多く見られる。また、1886 年の矢島錦蔵訳の『心理学(倍因氏)』において、「feeling 感情」の対訳が用いられて以降、心理学書における「感情」という訳語の使用が多くなっている。しかし、同時に、「feeling 感覚」の使用と拮抗している関係が見られる。

実際に、1875 年から 1911 年にかけての「感応」「感覚」および「感情」の使用状況について、“NDL Ngram Viewer”を利用し調査すると、図 2 のようにこれら三つの訳語の時代推移による使用例が確認できる。

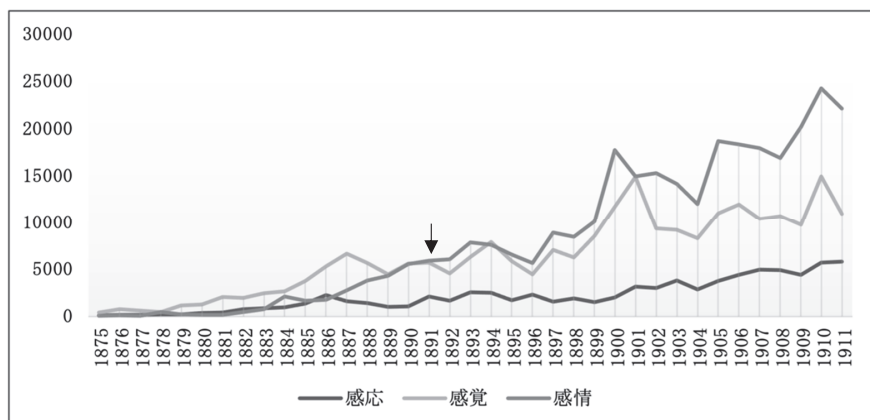


図 2 1875 年～1911 年における「感応」「感覚」「感情」の使用件数の変動

つまり、1890 年になると、「感情」と「感覚」の使用件数はほぼ同じになり、それぞれ 5546 件と 5580 件見られ、1891 年に「感情」の使用件数がついに「感覚」を超えた。そして、1895 年以降、「感情」はずっと「感覚」より多く、主流になったことが確認できる。しかし、1890 年以降の心理学書において、「感情」がどのように展開するのかについては、図 2 だけでは明確に判断することは難しい。具体的な心理学書における使用状況を確認する必要がある。

#### 4. feeling の訳語としての「感情」の定着

新心理学時代といわれる 1890 年から 1897 年にかけて、欧米からの児童心理学、生理心理学、実験心理学などの学説が次第に学者の間で唱えられるようになり、さらにベルバルト派<sup>21</sup>の学説が流入し、従来の学説に取って代わった。しかし、高島(1912:9)は、次のように指摘している。

此期は未だ一定の傾向なく、只新心理学の思想の入りたるのみにして、種々の説混淆せり。中には同一の書中に、新思想と舊思想と衝突して、読者を苦しむが如き奇観なきにあらず。是れ學問發達の順序に於いて、止むを得ざる次第なるのみ。

したがって、新心理学時代の心理学書において、「感覚」や「感情」の使用状況がどのように展開されるのかを検討する必要がある。そこで、明治期における feeling の訳語としての「感情」の使用状況を把握するため、新心理学時代の心理学書に加え、1898 年から 1911 年に刊行された心理学書も取り上げ、考察を行う。「感覚」と「感情」の使用状況についての調査結果を表 4 に示す。

表 4 1890-1911 年の心理学翻訳書における「感覚」「感情」の使用件数

訳者・刊行年・書名	件数	感覚	感情
元良勇次郎著(1890)『心理学』		336	27
牧瀬五一郎講述(1892)『新編心理学講義』		226	338
高島平三郎著(1893)『心理綱要』		220	142
元良勇次郎・米山保三郎著(1894)『生理的心理学講義・高等学術講義 文科編第 5 冊』		401	2
田中治六・三石賤夫訳(1894-1895)『麟氏実験心理学』		319	307
藤代禎輔訳(1895)『埤氏心理学』		259	142
石田新太郎訳(1895)『心理学 上巻』		496	191
神谷四郎訳(1897)『心理学』		29	172
尾田信忠訳(1897)『初等心理学』		284	335
松本孝次郎著(1898)『普通心理学講義』		212	128
牧瀬五一郎著(1899)『新撰心理学』		150	139

伊賀駒吉郎著(1901)『解説心理学』	561	213
速水滉著(1902)『心理学』	495	422
福来友吉著(1905)『心理学教科書』	222	59
福来友吉訳述(1906)『心理学精義(第7版)』	1063	50
福来友吉著(1907)『心理学講義』	781	93
野上俊夫・上野陽一著(1909)『実験心理学講義』	411	180
高島平三郎著(1911)『通俗應用心理講話』	155	138

表4からわかるように、「感覚」は福来友吉訳述『心理学精義(第7版)』<sup>22</sup>(1906)での使用が1063件で最も多い。それに対し、「感情」の使用件数が300件以上の心理学書は、『新編心理学講義』<sup>23</sup>(1892)、『麟氏実験心理学』<sup>24</sup>(1894-1895)、『初等心理学』<sup>25</sup>(1897)および速水滉著『心理学』<sup>26</sup>(1902)の四冊である。その中の速水滉著『心理学』(1902)における「感情」の使用が422件で最も多い。一方、『生理的心理学講義・高等学術講義 文科編第5冊』<sup>27</sup>(1894)のように、「感情」の使用件数がわずか2件の書物も見られる。

#### 4.1 「感情」概念の細分化

牧瀬五一郎講述の『新編心理学講義』(1892)は初学者向けの心理学教科書である。その附録には、学習者のための参考として、哲学小辞典が加えられた。この哲学小辞典では「感覚」「感情」と対応した英語および意味解釈が確認できる。

(11) <sup>フィーリング</sup> Feeling 感情 感情とは精神が快樂若しくは苦痛を感じる現象にして感覺的  
感情、審美的感情、倫理的感情等之に屬す、(5頁)

(12) <sup>センセーション</sup> Sensation 感覺 感覺とは外界の刺激によりて神経系統中の末端知覺神經刺激せられ、之によりて精神中に生起する一種の精神現象なり、例之ば視覺聴覺の如し、(11頁)

この記述から明らかなように、『新編心理学講義』において「感覚」と「感情」は、それぞれ sensation と feeling の訳語として使用されている。

高島平三郎著『心理綱要』<sup>28</sup>(1893:177)には「感情ノ字ハ、情緒ト同意義ニ用フ」と明記されている。すなわち、『心理綱要』における「感情」は「情緒」と同義であり、英語 feeling の訳語として使われているわけではない。それに対して、「感応」と「Feeling」の対応関係が確認される。また、「感応」と「感覚」、あるいは「感応」と「情緒」及び「感性」の関係の複雑さについて論じている部分もある。まず、「第三編 感性」の「第一章 總説」の部分には、

(13) 感覺ハ、知性ニ属スル、最單純ナル觀念ナレ |モ、此中ニハ、感應 Feeling. ヲ包含スル場合、多キガ如シ。而レドモ、二者必シモ、同時ニ發生スルモノニ非ズ。通常感覺(即知性ニ属スルモノ)アリテ後ニ、感應ヲ生ズルナリ。(170頁)



と、「感応」は「感覺」の中にあり、「感覺」の後に生じるものであるとある。そして、「情緒」と「感応」及び「感性」については次のように書いてある。

(14) 感性トハ、苦樂ノ全體ヲ包括シタル、精神現象ニシテ、英語ニテフィーリング Feeling. ト云フモノナリ。……(中略)……或ハ感應 Feeling. ト云ヘリ。故ニ感應 中ニ、情緒ヲ入ル、モノアリ。(サレイ) 情緒 中ニ、感應ヲ入ル、モノアリ(ベイン) テ、甚紛ハシ。(176-177 頁)

(14)には、「情緒」の中には「感応」があり、「感応」の中には「情緒」があるという紛らわしい関連性が見られる。すなわち、『心理綱要』において「感情」は「情緒」と同義で用いられていることから、「感応」と「感情」は明確に区別されていないことが分かる。要するに、1893 年ごろ、「感情」はまだ feeling の訳語として定着していないと考えられる。

一方、1894 年の元良勇次郎・米山保三郎著『生理的心理学講義・高等学術講義 文科編 第 5 冊』のような生理的心理学に関する書物では、肉体の感覺器官による作用の記述が多いため、「感覺」が頻繁に使われていた。それに対し、田中治六・三石賤夫訳『麟氏実験心理学』(1894-1895)の下巻「第二編 感情」の中に、「審美的感情」「道徳的感情」「宗教的感情」「我情」「同情」という節が設けられている。これらと、湯本武比古が訳した『学校実用心理学 第二』<sup>29</sup>(1891:1)に見られる「審美的、宗教的、道義的ノ感應ヲ併稱シテ、理想的感應ト云ヒ、自己感應ト同感ヲ併稱シテ、神聖的感應ト云フ」という分類法には共通点が見られる。要するに、『麟氏実験心理学』でも「感応」の代わりに「感情」が使われている。

さらに藤代禎輔訳『埤氏心理学』<sup>30</sup>(1895)には、「感覺」と「感情」はそれぞれ 259 例と 142 例確認される。その中には、「感覺」は「知覚」と一緒に使われることが多く、「感覺知覚の能力」は「覺官」といい、「覺官」には「視官、聴官、味官、嗅官、觸官」の 5 つが含まれる。一方で、「感情」は『埤氏心理学』(1895:180)では、「其の内容に従ひ、身軀、知能、倫理、審美の四つ」を含む概念として捉えられている。このことから、『埤氏心理学』で論じられている「感情」は『麟氏実験心理学』で用いられる「感情」と類似している。

また、石田新太郎訳『心理学 上巻』<sup>31</sup>(1895)には、「感覺」と「感情」はそれぞれ 496 件、191 件見られる。この書の「例言」には、

- 一 其出版幾ならずして獨に英に米に歡迎せられ、遠く本邦學者の間にも愛讀せらるゝこと既に數年にして益賞讃の聲を高め來る所以のもの、蓋し叙述周道にして取捨其當を得以て輓近の斯學發達を窺ひ今後の實驗心理學の趨勢を察するに足るあればなり。

とある。この「例言」から、原本は広く訳されており、この本をもって「實驗心理學の趨勢を察する」ことができる。特に、『心理学 上巻』では、「感覺、思想、感情等」を「精神元素」と称し、具体的には次の記述がみられる。

(15) 感覺 思想 及び 感情 は精神活動にして、是等を起したる一定の各關係が終るときに

は存在するを得ざるものなれば有機的作用に適應するものにして、化學的要素の如きものにあらざるなり。(119 頁)

ここでは、「感覚」「思想」「感情」は「精神活動」としての重要性をもつことが示されている。つまり、この時期の心理学において、「感覚」と「感情」が特に重視されていたことがわかる。

以上のように、1895 年頃、「感情」はようやく「身軀感情」、「知能的感情」、「倫理的感情」、「審美感情」という形で細分化され、その概念はまさしく「感応」が細分化されたものと一致している。このことから、この時期における「感情」は「感応」の概念を引き継ぎつつ、徐々に定着したと考えられる。

#### 4.2 「感情」に含まれる「感覚」

1897 年の神谷四郎訳『心理学』<sup>32</sup>の「附言」には「一般ノ學者教育家ノ参考」や「師範學校教員講習會ノ教科書若クハ参考書トシテ極メテ適當ナルヘキ」と述べられており、特に「譯語ハ、成ルヘク從來ノ慣用ニ從ヒ」と明記されている。この書の「感情ニ屬スベキ諸現象」には、

(16) 其明著ナルモノ三アリ、曰ク官覺的ノ苦樂、曰ク醜美ノ感、曰ク情緒是ナリ。サレトモ、感情ハ決シテ此三種ニ限ルヘカラス。(111 頁)

とある。ここにおける「官覺的ノ苦樂」は「感覚」のことであり、いわゆる「感情」には「感覚」、「醜美の感」および「情緒」という三種類に限られるだけではないが、明確に取り上げられているのはこの三つである。すなわち、「感覚」や「情緒」は「感情」に属することが明らかである。

同様に、尾田信忠訳『初等心理学』(1897:73-74)にも、「感情」には「快樂」と「苦痛」の二種類と「中性的のもの」があると言われている。「中性的のもの」とは「ある感覺殊に觸覺は所謂嚴正に感情に屬せり」である。さらに、「感情」は以下のような四種類に分けられる。

(17) 感情を分類するには感情の生起する機會又は感情の最も親密に關係せる智識活動の種類よりするは最も便利なり。此方法にて吾人は次の分類を得。即ち(一)感覺的感情、(二)智力的感情、(三)美的感情、(四)道德的感情是なり、(75 頁)

要するに、『初等心理学』で扱われる「感情」には「感覚」も含まれている。また、「感情」が「美的感情」や「道德的感情」などに再分類されたことから、この時期の心理学書において「感情」はすでに「感応」に取って代わり、広く使われていたと考えられる。

1898 年の松本孝次郎著『普通心理学講義』<sup>33</sup>には、「感覚」と「感情」の違いについて、次の記述がある。

(18) 感覺なるものはある特殊感官を刺戟することに依て起り感情なるものはその刺戟が身體全體に及ぼす所のものによりて起る。(136 頁)

ここから、「感情」は「感覚」の後に生じることが明確となる。この点は、前述の『心理綱要』(1893:170)における「感覺(即知性ニ属スルモノ)アリテ後ニ、感應ヲ生ズルナリ」という記述と一致している。

1899 年になると、牧瀬五一郎著の『新撰心理学』<sup>34)</sup>には、「心界」というものが「知識」「意志」「感情」の3つに分けられ、次のような記述が見られる。

(19)之を大別すれば三種となる、知識意志感情是なり、(知情意と次第するものもあり)知識とは知知識別的作用にして、意志とは動搖衝起的作用なり、此等の諸種の情態に伴ひ別に發現する現象を感情と名づく、(15-16 頁)

また、「附録」には、「知識(ノレッジ Knowledge)」、「意志(ウィル Will)」および「感情(フィーリング Feeling)」が確認される。すなわち、これらの三語は、前述の『東洋心理初歩』(1885)における「感応」「意志」「智力」と一致している。同様に、1901 年の伊賀駒吉郎著『解説心理学』にもこの三分類が受け継がれている。また、『解説心理学』(1901:34)にも、「吾人ノ智識感情及意志ハ、總ジテ我ノ究竟ノ中心トナルモノニシテ」と述べられており、同じく三分類が見られる。

1902 年に刊行された速水滉著『心理学』の「例言」の一部には、以下のような記述が見られる。

- 一 最後に附せる譯語一覧は此書に用ゐたる重なる術語に就て記せるが故に、心理学上の用語にして尚此に漏れたるものあるべし。
- 一 此書を著すにあたり参照したる書籍少なからず。就中ヴント、ゼームス、ラッド、チツチエナー、サリー、ヘフチング、リボー、並びに恩師元良博士の思想に負ふ所多し。

この記述から、速水滉著『心理学』はサリーと元良勇次郎の心理学の影響を受けていることが明らかとなる。そして、附録の「英獨對照譯語一覧」の中には、

感覺	Sensation(die Empfindung)
外感覺	Outer sensation(die äussere Empfindung)
関節感覺	Articular sensation(die Gelenkempfindung)
感情	Feeling(das Gefühl)
感覺的感情	Sensual feeling(das sinnliche Gefühl)
覺念的感情	Intellectual feeling(das ideelle od, intellectuelle Gefühl)
感覺機關	Sense organ(das Empfindungsorgan)
感覺反動	Sensory reaction(die sensorielle Reaction)
内感覺	Inner sensation(die innere Empfindung)
無感覺	*Anästhesie
運動感覺	Sensation of movement(die Bewegungsempfindung)
緊張感覺	(Die Spannemfindung)
有機感覺	Organic sensation(die Organempfindung)

とあり、「感覚」「感情」に関連する用語が計 13 語見られる。sensation の訳語としての「感覚」は「外感覚」「感覚機関」「感覚反動」などのように多くの複合語が用いられている。それに対して、「感情」は feeling の訳語として、「感覚的感情」「覚念的感情」という 2 つの複合語に限られている。言い換えれば、心理学書において「感覚」は多くの複合語を生み出した結果、「感情」より頻繁に使われるようになったと言える。

福来友吉著『心理学教科書』<sup>35</sup>(1905)と『心理学講義』<sup>36</sup>(1907)の両方にも、明確に「感覚に伴ひて生ずる情念を感情」と記述されている。この点は、『心理綱要』(1893)および『普通心理学講義』(1898)の記述と一致している。また、米国ウィリアム・ゼームス著『心理学原理』(1890)を底本として訳された福来友吉訳『心理学精義(第 7 版)』(1906)の「著者序」には、

多くの生徒は心理學に就いて全く無知にして、只本書の論文説丈にては不足なるが故に、感覺論の所に於いて、別に短き章を附加して之を口授したりと述べられている。この書は「感覚」について重きを置き、第 2 章から第 6 章までの論説はすべて「感覺論」のものである。このような構成から、今回の調査では、『心理学精義(第 7 版)』における「感覚」の登場件数が最も多い結果となった。

また、1909 年の野上俊夫・上野陽一著『実験心理学講義』<sup>37</sup>では、次のように「感情の三方向」が指摘されている。

(20) 吾々の有する感情には第一快・不快の方向、第二興奮・沈静の方向、第三緊張・弛緩の方向という三方向があるといふことが出来る。(444 頁)

その「興奮・沈静の方向」は「赤を見た時は、吾々の心は何となく快淵に浮立つやうに感ずるが、青を見た時は何となく沈鬱に氣が沈むやうに感ずる」ことを指す。すなわち「感覚」による「感情」である。

同様に、高島平三郎著『通俗應用心理講話』<sup>38</sup>(1911)においても、「感情の方向」には「快と不快」、「興奮と沈静」および「緊張と弛緩」の 3 つが含まれている。特に、「興奮と沈静」は『実験心理学講義』(1909)の記述と一致している。したがって、この時期になると、「感情」には「感覚」が含まれており、「感情」は「感応」に代わる概念として確立されたといえる。

このように、1897 年以降、「感情」には「感覚」が含まれているようになり、「知情意」の三分類に基づいて広く使用されるようになった。その結果、feeling の訳語としての「感情」は完全に「感応」に置き換えられた。しかし、なぜ 1897 年以降に至って「感応」が完全に「感情」へと転換されたのだろうか。この点については、佐々木(2013:49)が「元良勇次郎らが当時の代表的な実験心理学者であったヴントの『心理学概論』の翻訳(1898)において、Gefühl を「感情」と訳出したあたりからと思われる」と指摘している。

## 5. まとめ

英語 feeling は、1881 年の『哲学字彙』において最初に「感応」と訳された。しかし、翌年の『英和字彙 増補訂正改訂 2 版』(1882)では、feeling の訳語として「感応」に加えて「感情」も採用された。さらに、心理学翻訳書である『心理学(倍因氏)』(1886)における「Feeling 感情」の翻訳を通じて、この英語概念の日本語訳は「感覚」「感情」「情感」「感触」「感」など、様々な語で現れるようになった。

明治期の心理学の初期段階では、特にバインの著書の翻訳ブームによって、「感応」という語が頻繁に使用された。しかし、この時期には、英語 feeling の訳語として「感情」「感覚」および「感応」が混在して用いられる現象も見られた。1887 年頃になると、「感応」の使用が次第に減少し、その代わりに「感覚」や「感情」といった語が混用される傾向が見られる。

明治中後期に至って、「感応」の概念が細分化されると同時に、「感情」も同様に分類されるようになった。心理学書および英和辞典では、feeling の訳語は「感応」から徐々に「感情」という語に置き換えられていった。これは、「感応」という語が心理学書物から退潮していったことの象徴であると言える。それに対し、物理学用語としての「感応」は「電気」「電流」「磁気」と強く結びつき、そのまま定着した。中国語もその影響を受け、心理学用語から物理学用語へシフトしている。このプロセスについては、別稿に譲る。

### 【注】

- 1) 川本清一訳(1882)『百科全書: 人心論』内田芳兵衛。
- 2) 倍因(バイン)著, 井上哲次郎抄訳, 大槻文彦校(1882)『<sup>倍因氏</sup>心理新説』青木輔清。
- 3) 麻生繁雄編, 井上哲次郎訳(1883)『<sup>倍因氏</sup>心理新説釈義』同盟舎。
- 4) ベー・マース著, エドアルド・ボック抄, 湯本武比古訳(1888)『小学校教師用心理学摘要』博文堂。
- 5) 雲英晃耀著(1885)『東洋心理初歩』雲英晃耀。
- 6) 普及舎編(1885)『術語詳解: 教育心理論理』普及舎。
- 7) ガブリエル・コンペーレ著, ウキリアム・ペーン訳注, 能勢栄重訳(1893)『根氏心理学(教育応用)』金港堂。
- 8) Oxford English Dictionary (<https://www.oed.com>) を参照。
- 9) ヘブン「(Joseph Haven; 1816-1874: 神学博士・法学博士)は、1816 年 1 月 4 日, アメリカのマサチューセッツ州デニスで生まれた。アマスト・アカデミーからアマスト大学へ進学し, そこで 1831 年から 1835 年まで学んだ。卒業後, ユニオン神学校, 続いてアンドーヴァー神学校の神学生となり, 1839 年, アシュランド(旧名ユニオンビル)教会の牧師となった。7 年後, ハーヴァード教会へ移り, その後, 1851 年から 1858 年まで, 母校アマスト大学の精神哲学・道徳哲学(intellectual and moral philosophy)教授を務めた。1858 年からシカゴ神学校組織神学教授を務め, 1870 年に退職した」(太田 (1997: 26))。
- 10) 約瑟・奚般著, 西周訳(1875-1876)『心理学』文部省。
- 11) バイン(Bain, Alexander: 1818. 6. 11~1903. 9. 18)「イギリスの心理学者, 哲学者。アバディーン大学の論理学, 英語学教授 [1860]. イギリスの連合心理学の組織者。従来の心理学は哲学者, 生理学者のいわば副次的仕事であったが, これを専門の仕事としたのは彼に始まる。心理学説としては観念連想以外に心的活動の自発性を認め, 動能を強調したことを特色とする。井上哲次郎は, 彼の心理学を《倍因氏心理新説, 1882》によって紹介した。心理学的論文を発表する場として《Mind》を創刊した [74]。【主著】The senses and the intellect, 1855. The emotions and the will, 1859. Mental and moral science, 1868. Logic, 2 巻, 1870. Mind and body, 1872」(『岩波 世界人名大辞典』による)。

- 12) サリー(Sully, James:1842.3.3~1923.10.31)「イギリスの心理学者、美学者。ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン教授 [1892-1903]. 知覚を心理的要素と認めた。イギリス連合主義心理学に連なる。また美的感情の最高度は、最大多数の最大幸福によって達成されるとし、功利主義的立場をとった。『主著』The human mind, 2巻, 1892. Outlines of psychology, 1884. Studies of childhood, 1895) (『岩波 世界人名大辞典』による)。
- 13) 有賀長雄著(1886)『教育適用心理学』牧野書房。
- 14) 亜歴山倍因(アレキサンダー・ベイン)著, 松島剛、田中登作等訳(1886)『心理全書』普及舎。
- 15) 亜歴山倍因(アレキサンダー・ベイン)著, 矢島錦蔵訳(1886)『心理学(倍因氏)』不明。
- 16) アレキサンダー・ベイン著, 谷本富等訳(1887)『心身相関之理』大倉書店。
- 17) 西村茂樹著(1885-1886)『心学講義』丸善商社書店。
- 18) 宮川鉄次郎著(1890)『心理学(新撰百科全書)』博文館。
- 19) 惹迷斯・左来(ゼームス・サレー)著, 和久正辰訳(1887)『左氏応用心理学』牧野書房。
- 20) 西村茂樹著(1886)『心学講義』(第5冊-第6冊)丸善商社書店。
- 21) 「心理学は、ヘルバルトにとって新しい科学である。それは経験的科学であって、その方法は実験ではなく観察である。彼は‘科学(ウィッセンシャフト)として’という時、哲学を除外していない。むしろ、形而上学的性格は心理学を他の物質科学と区別するものであると考えていたようである。心理学は形而上学的であり、物理学は実験的である。心理学は実験的ではない数学的である。しかし彼の数学の利用は実際の測定を伴わない数学的思考であって、真に数学的とはいえない。彼は生理学と実験と測定とを否定したにかかわらず、結果的には生理的実験心理学促進の役割を果たすことになり、それはヴェントによる実験と、フェヒネルによる測定によって、はじめて実現したのである」(今田 1962:174-175)。
- 22) ウィリアム・ゼームス著, 福来友吉訳述(1906)『心理学精義(第7版)』同文館。
- 23) 牧瀬五一郎講述(1892)『新編心理学講義』三木書店。
- 24) リンドネル著, 田中治六、三石賤夫訳(1894-1895)『麟氏実験心理学』牧野書房。
- 25) ジオルジ・トランブル・ラッド著, 尾田信忠訳(1897)『初等心理学』富山房。
- 26) 速水滉著(1902)『心理学』博文館。
- 27) 元良勇次郎、米山保三郎著(1894)『生理的心理学講義・高等学術講義 文科編第5冊』高等学術研究会。
- 28) 高島平三郎著, 西村正三郎訳(1893)『心理綱要』普及舎。
- 29) ベー・マース著, 湯本武比古訳(1891)『学校実用心理学 第二』金港堂。
- 30) デッテス著, 藤代禎輔訳(1895)『垺氏心理学』金港堂。
- 31) ハラルド・ヘフデング著, 石田新太郎訳(1895)『心理学 上巻』高等学術研究会。
- 32) ヘルバルト著, 神谷四郎訳(1897)『心理学』文学社。
- 33) 松本孝次郎著(1898)『普通心理学講義』岡崎屋書店。
- 34) 牧瀬五一郎著(1899)『新撰心理学』三木書店。
- 35) 福来友吉著(1905)『心理学教科書』宝文館。
- 36) 福来友吉著(1907)『心理学講義』宝文館。
- 37) 野上俊夫、上野陽一著(1909)『実験心理学講義』同文館。
- 38) 高島平三郎著(1911)『通俗應用心理講話』六合館。

## 参考文献

- 今田恵(1962)『心理学史』岩波書店
- 太田恵子(1997)「コラム4 ジョセフ・ヘヴン」佐藤達哉、溝口元編『通史日本の心理学』26-27, 北大路書房
- 佐々木護(2013)「感情・情動・情念・情熱」石塚正英、柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典(増補版)』48-49, 論創社
- 高島平三郎(1912)『心理百話』洛陽堂